

学校選択制について考える Part2

お話：高橋成悟さん（市内中学校教員）

- ▶ 今、どこの学校でも、一日授業参観というのをやりますが、うちの中学校の場合は、管理職がはりきっているいろいろな小学校に案内の手紙を出しているらしくて、それを見て授業参観に来られる方がいます。また、放課後の部活の見学というのもやっていますが、われわれ教師は普段どおりやっているだけですから、そのことで忙しいということはありません。管理職は忙しいみたいです。去年・今年と2回やったわけですが、去年は保護者の方は結構来られました。今年はあまり来ませんでしたね。学校選択制の事務的なことで、先生方が煩わされることはないのですね。学校見学の時は教頭が案内して回りますが、それほど大勢来るわけではありません。
- ▶ 保護者の方がたった1日見学に来て、どういう学校かわかるのでしょうか。わからないでしょうね。松戸市教委のアンケートによれば、どういう基準で学校を選んだかという問いに対して、学区内の学校であるとか、通学路が安全で近いとかというのが選択の中心になっていて、教育の内容で選ぶというのはとてもわずか。ですから学校見学に行って、親が見るのは施設面でしょうね。
- ▶ 見せる側も、こういうところを見てほしいというのが強くあれば、そこをアピールするから見えるかもしれないけれど、この制度自体、現場の教師が賛成しているわけでもなく、いっぱい来てほしいとも思っているわけでもない。松戸はまだ導入したばかりですが、先行して導入されている品川区では、年々選択制を利用して他学区へ行く割合が徐々に増えてきている。松戸の教育改革でも、選択制を評価と結びつけて考えていますよね。より多くの子ども・保護者に選ばれる学校が、いい学校というように、一つの評価基準として選択制をとらえている。今の時点ではそれほど選択の偏りがなくても、今後学校間の格差が出てきた時には、もっと生徒を獲得しようということに必死にならざるを得ない状況になるのではないのでしょうか。
- ▶ 管理職の評価と結びついてくれば、そういうことになるでしょうね。

選択制というのは、学校間競争をさせるということ

- ▶ 市教委は、選択の幅を徒歩で通える範囲としましたよね。昨年の例ですが、学区外の保護者から「電車通学になるけど選択したい」という問い合わせがあって、それに対して市教委は「それは校長の判断だから校長に聞いてくれ」と言ったそうです。校長は、「徒歩通学が原則」と断ったのだが、同時に市教委に対しても文句を言ったそうです。他の学校の話聞いてみると、校長の判断で「電車通学でもいいですよ」と答えていることが何件かあるようです。教育委員会は、「自由化ではない。

限定している」と言っていますが、実態は違います。

- ▶ 選択制というのは、学校間競争をさせるということです。一つは経済的な面で、学校をつぶすということがあります。もう一つは、松戸でどの程度考えているかどうかわかりませんが、競争させて学校の質を変えろという面があります。選択の基準となるのは、部活とか、学校が荒れてないかどうかとか、学力とか…。東京では、実際に学力テストの結果が学校ごとに公表されているところがありますね。
- ▶ 教育を行政サービスとしていますね。子どもと親はお客様。台東区で区役所の職員がホテルへ研修に行き、「コップ一つ出すのが次の日の商売に影響するということを知りました」と今朝の朝日新聞に出ていましたが、そんなことを学んでどうするの？ 公務員の市民に対する仕事と商売するためのサービスと混乱しているのと同じように、学校も手厚く面倒を見てあげるのがいいサービスとしている。競争主義的な学力の競争を学校の中に持ち込もうという狙いのほうが、経済的な問題よりももっと大きいのかも知れない。今の教育行政の狙いを貫徹するために、これに、管理職の評価、教員の人事・評価すべて関わってくれば、皆必死にやりますからね。最後は給料とくびにするか。そういうことをすれば教員が言うことを聞くようになると。そのような全体の流れの中の一つでしょうね。

- ▶ うちの中学校でも部活で来ている子が結構多いですね。私が住んでいるところのそばに、バレーボールで毎年全国優勝する区立中学校があるのですが、そこには東京中から子どもたちが集まってきています。でも公立中学ですから、顧問の先生が10年くらいで異動しました。そうしたら、その子どもたち全部くっついて異動してしまいました。それまでレギュラーになれなかった地域の子どもたちは、少しは自分たちもできるようになると思ったのに、バレーボール部はなくなってしまいました。そこまで行かなくても、部活で選ぶというのはそういう問題が明らかにあります。

学校というのは地域性というのが大きいですね。都心へ通勤するサラリーマン世帯が多い地域とか、農家や商店が多い地域とか、そういう地域性がある。学校選択制が導入されて、選ばれることが学校の評価になってしまっ、そのうち学力テストの結果が学校の評価につながってってしまうかもしれない。学力というのは、どういう階層の子どもたちが通っているかによって違ってきますよね。それが評価の基準になってしまうというのは問題だと思います。

能力別授業を行うことで、教師はものすごく忙しくなっている

- ▶ 小さな学校というのは、行政側から言わせると効率が悪いわけです。費用対効果（効果って何？ ということがあるけれど）を考えると、コストが高いと言うわけですね。そういう言い方に賛成する保護者や地域の人が多いのですが。
- ▶ それは本質論しかありませんね。教育にはお金がかかるのだということです。教育にはお金をかけなければいけないのだと。現実問題としては、学校をなくせばかかるお金は減ります。でも、かけるお金を減らしていいのかが。

- ▶ 今、能力別授業を行うことで、教師はものすごく忙しくなっています。授業の持ち時間が増えて。たとえば、1クラスを能力別に3つに分けると、今まで教師が一人ですんでいたのが、三人必要になります。学校の先生の数が増えるわけではありませんから、空いている時間でやりくりします。でも無免許です。社会の先生が数学をやっていたり、理科の先生が英語をやっていたり、体育の先生が美術をやっていたり…。



- ▶ うちの中学校は、数学が能力別授業。それと選択教科も能力別でやっています。3年生は1週間に4コマが選択教科です。国語のA・B、数学のA・B、英語のA・Bの中から2つ選びます。それが2コマ。その他、体育・音楽・美術などの中から選ぶのが1コマ。もう一つは何だったか？ 誰もよくわからないうちに始まってしまった。6月位まで、自分が何をしたいのかわからなかった！ 誰がどの教科を受け持つのかは、教員同士で話し合っただけではなく、校長の命令。私は、選択の国語のA・Bと、1年生と2年生の国語を受け持っている。子どもの側から言うと、3年生の場合は選択4コマ、数学が3時間能力別で、1週間のうち7時間はクラスが分かれてしまう。クラスであったって授業が大変なのに、クラスが分かれてしまったらめっちゃくちゃ。しかも、できない子はできない子で集まっている。子ども同士の教え合いをやることができない。やる気がまずない。教室に入れることから大変。

- ▶ 選択の理想は、少人数で、皆がそれぞれの希望で選んできてやるのならいいのですが、選びたくないけれど、この中から選べというから仕方なく選んできたというのが現実です。人数はクラスと同じ人数(だいたい37から39人)。2年生の国語の選択は38人いるんです。教室がびっしり埋まりましたね。もう一人来たら座るところなくなってしまう。ほとんどがやりたくないのに来ている。クラスであれば、今ま



でのいろいろな積み重ねで、不十分どころがありながらも何とかやれるのだが、クラスが分かると子どもたちの気分は自由になってしまっている。

- ▶ 学校選択にしても、選択教科にしても、能力別にしても、全部が一つの流れでしょうね。やればやるほどダメになる。現場の教師はそれを感じている。でも今は行政の力がどんどん強くなってきている。

「自己選択・自己責任」というのは、行政側の責任放棄

選択教科の導入の際に、理由として説明されたのが「子どもたちの多様なニーズにこたえるため」ということ。今回の学校選択制導入の理由も「子どもや保護者の多様なニーズにこたえるため」だった。

- ▶ 親に多様なニーズはありませんよ。「きちんと学力つけてもらいたい」と思っていない親はいないし、「しっかり大人になってほしい」と皆思っている。学力の中身について多少意見の違いはあるかもしれないけれど、抽象論で言ったらニーズは一つ。
- ▶ 実際大変なクラスがあったときに、親からの攻撃・批判はすごいですよね。「いい学校だと思って選んできたのに」という思いが、気持ちの中にあると思いますね。も

ちろんそれに答えなければいけないと思うのだけれど、「いい学校だと思って選んできたのに、これは何だ」と言われても困ってしまう。

- ▶ 医者インフォームドコンセントというのも微妙なところがあるといえます。ほっぽりなげている医者もいると。選ぶ材料を十分そろえて、医者として「私はこう思いますけれど」というべきだと思います。好きに選んでくださいというのでは無責任。同様に、学校選択制での「自己選択・自己責任」というのは、行政側の責任放棄です。でも、親とすれば、学校入れた限りは学校が責任を持つべきと思うでしょう。親と教師の対立が深まりますね。
- ▶ 学校教育の中で部活は微妙な立場にあるのだけれど、これを完全に手放してしまうと、授業でも困る。たとえば、地域少年野球のスパルタの中で育ってきた子が学級の中でそのストレスを発散するという例がとても多い。それは野球だけではないのですが。今の状態の中で、部活は社会教育だと簡単に投げ捨てるというわけにもいかない。本当は投げ出したいという思いもあるのですが、そのことがいっそう授業を成り立たせるのに苦勞するから、そう簡単に投げ出せない。勝利至上主義などの問題もあるけれど、教師は教育のプロだから教育的な部分があるんです。学校で部活をやっているほうが、子どもたちにまだストレスがたまらない。

父親は 常に勝ち組になるか負け組になるかという社会の中で生きている

- ▶ 最初に教育にはお金をかけなければいけないだと言いましたが、社会の問題としてお金をかけるということと、個人がお金をかけるということがゴチャゴチャになっているというか、むしろ逆転している。まさにこれは効率主義の政策そのもの。公的な部分を引き上げて、全部私的なところでやらせようとしている。
- ▶ 今、お父さんが学校のいろいろな場面に出てくるが増えてきて、お父さんが夢中になってしまう。常に勝ち組になるか負け組になるかという社会の中で生きているから、自分の子どもを絶対負け組にさせたくないというのがとても強い。たぶん部活への介入もそこから出発しているのだと思う。負けないことの最大のものは攻撃なんですね。学校で何かトラブルがあった時も、まず攻撃をかけるんですよ。その出発点は、彼らが社会で負け組になればリストラされてしまうという厳しさの中にいるということ。そこに共感をして始めて、そういう方と話が通じるのだけれど、そこが共感できないと関係は爆発しますね。

そういう人から見ると、先生というのはリストラされないところにいる存在として不満が募る。だから学校も先生も競争の中でもまれる厳しさが必要だと言うでしょう。

「先生みたいにやっていたら、民間ではやっていけないよ」とね。

- ▶ 教師は民間ではないんです。民間の儲けようという会社と教育では違うのですから。同じことをやっていたら、おかしなことになってしまいます。そこをわかってもらわないと。でも今、行政はそれを同じようにしようとしている。民間の経営手法を学校に持ち込もうとしている。

はっきり目に見える成果をすぐに出さなくてははいけないし、それを出せないと評価

されない。

- ▶ 選択制でいっぱい生徒が来る学校の校長がいい評価を受けるというのは、客がいっぱい来るのが偉いというのと同じ。

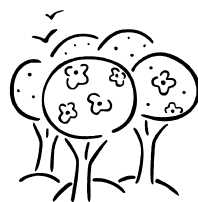
お店の売り上げに当たるものは、学校では何でしょうね。子どもと親の満足度？

教育委員公選制の運動をもう一度活発にしていく必要がある

東京で怖いなぁと思うのは、校長の権限が強化され、校長が人事権を持っているということ。

- ▶ 東京の五反野小学校では、教員の公募をしている。五反野小学校の校長はベネッセ出身。

地域運営学校として、学校理事会があるところですよ。理事長は地域の人、副理事長はPTAの副会長。学校の教育理念に賛同する教員を公募していて、面接も学校理事会で行うらしい。松戸の教育改革の中にあげられているコミュニティスクールというのは、あのような学校をイメージしているのではないのでしょうか。学校・地域・保護者が集まって、さまざまなことを話し合って決めていく。これまで親や地域の人が話しに加われなかった教育内容・学習内容についてまで話し合う。



- ▶ 地域の人をどのように選ぶのか。これはまさに教育委員の公選制の問題と同じ。上から指名されて、気に入った人だけ集めてたら大変なことになるし、本当に地域の人たちの意思を反映したような人が集まってくるなら、これは大きな力になる。

その地域が優れた力を持っていたら、地域や保護者の考えを反映した、先生と一緒に作った学校協議会のようなものになるだろう。地域の力が試される。

- ▶ 地域が成熟していない時にこのシステムが入ったら、どうなるのか。

今の日本の社会のように排除の方向が強くなっている時に入ったら、どうなのかということですね。

- ▶ 一つ一つの制度が社会と切り離れた時にいい制度であっても、今ここにそれを持ってきた時にそれがいいのか。あらゆる問題が関わっているから、簡単に「賛成」「反対」とまとまらない。

今の教育行政が、全体としてどういう方針でどういう趣旨を持って進めたうえで考えないといけない。学校運営協議会も一見よさそうに思えて飛びついてしまうのだけれど、そういう形で取り込まれてしまいそう。選択制もその一つではないかと思う。実態を見ていくと、大変な問題だと思う。

- ▶ そういう意味で、その突破口になるのは教育委員の公選制だと思う。教育委員を公選制にするという思想がない限り、地域の学校ごとの理事会も結局思想的には同じ。公選制の運動をもう一度活発にしていく必要があると思う。今回松戸の学校統廃合の問題で、皆教育委員会会議の傍聴へ行って、教育委員会会議で決めるんだというのがわかったと思う。

少なくとも本質的な議論ができる場になってほしいですね。週刊誌の見出しを読んだような感想を述べ合うようなところだったり、何の発言もなく決まる場所だっ

たりというのが今までの実態。意見のキャッチボールがほとんどない。
やはり、教育委員が市長に任命されるというところに問題がありますね。

一部の優秀な人間と大多数の従順な人間を作るという基本は一切変わっていない

- ▶ 教師の側で学校選択制による明らかな影響があるのは、家庭訪問と早退。子どもが早退するときは教師が送って行っています。具合が悪くて帰すのに、家が遠くて歩いて帰せない。親に迎えに来いとは言わずに、送っていきます。サービスですかね。

学校の内部の目線から選択制を見ると、そんなに変化の実感はない。

親のほうも、60%以上の人が地域の学校へ入学させているから、選択制が導入されたって地域の学校へ行っているんだから何も変わらないと思う人が多いのじゃないかな。

選択制に伴って学校そのものが変えられるということが大きな問題なのではないでしょうか。

選択制だけではないということですね。評価のこととか、教師の管理のこととか、日の丸・君が代のこととか、いろいろなものが全部つながっているということですね。



- ▶ 学区の自由化を機会に、学校をつぶしやすくなりましたね。つぶそうと思ったら苦労しないでつぶせる。「ここは廃校になるらしいよ」という噂を流せば、それで決まりです。

- ▶ 圧倒的多数の市民は良心的だから、子どもが賢くなったり、立派になったりするために教育改革をするんだと思いますよね。何を狙っているかということ、ごく一部の人間ができるようになればいいのと、大多数の人間が従順であればいいのだと、そういうふうに作りたいということが基本にある。すべてそこから出発している。こんなことをしたって子どもは賢くならないという批判をしても、ある意味の外れている。そうしようと思ってやっているわけではないのだから。ただ、ごく一部の優秀な人間を作ろうと思ってやっているのに、その一部も優秀ではなかった。それでいろんなことを変えている。一部の優秀な人間と大多数の従順な人間を作るという基本は一切変わっていない。でもどうやってもその一部の優秀な人間を作れないでいる。

雑多な人間の中でリーダーシップをとる経験をつんでいかないと。いろんな人に対してどう向き合うのかという積み重ねをしていかないと育たないですね。

- ▶ 良心的な人たちがいろいろ努力しているから、多少ぐちゃぐちゃになりながらも何とか持ちこたえている。皆が「しかたがない」となったら、ぐちゃぐちゃでリーダーもできないという時代が来るでしょうね。

親もあまり振り回されずに、自分の子どもや周りの子どもたちをしっかりと見て、大事に考えていくしかないですね。

- ▶ 親はどこかでけつをまくるしかないんですね。